

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520870

研究課題名(和文) 韓国梵字文化の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Research of the Korean Sanskrit Characters Culture.

研究代表者

高 正龍 (KO, JUNGYONG)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40330005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は韓国における梵字が施された文物に対する総合的研究である。韓国の梵字は高麗から朝鮮時代にかけて、東アジア世界において中国の影響を受けながらも、中国とも日本とも異なる独自の展開をとげてきた。

韓国の梵字は銅鐘・銅鏡・香炉・瓦・仏画・石造品・腹蔵品など様々な文物に記されていることが確認できる。研究ではこれらの梵字を集成し、様々な文物ごとに変遷を明らかにすることによって、使用された真言・種子の変遷、字体の変遷、中国の梵字との関係について考察をおこなった。

研究成果の概要(英文)： This report is a comprehensive research of the Korean artifacts on which Sanskrit characters are inscribed or casted. In Korea, Sanskrit characters had been developed through the Goryeo and Joseon dynasties in a unique way unlike those of China or Japan, even under the influence of China in East Asia.

In Korea, Sanskrit characters can be confirmed with the Buddhist scriptures, bronze mirrors and bells, incense burner, roof-end tiles and decorated bricks, stone constructions, Buddhist paintings, dress and its ornaments, and so on. In this research, studied the relationship of China's Sanskrit characters, changing of Mantra and typefaces used, by collecting these Sanskrit characters and clarifying the changes of the various artifacts.

研究分野：韓国考古学

キーワード：梵字 真言 仏教

1. 研究開始当初の背景

韓国の梵字は日本における悉曇学という学問的に継承されたものがなく、梵字への理解がほとんど途絶えていた。美術史・考古学では梵字の施された文物がしばしば見られるが、単に梵字があるというのみで研究の対象にはされてこなかった。また、実際に日本の梵字の知識では韓国の梵字を読めない場合も多くあり、平成 17 年より東アジア梵字文化研究会を立ち上げ韓国梵字文化の研究をはじめることとした。

その後、我々の研究活動の影響もあって、美術史を中心とした分野でようやく韓国でも梵字の重要性が認識されはじめ、市民権を得るようになってきた。瓦・仏画・銅鏡・銅鐘・石造物といった梵字が比較的多く施される文物に対して論考が散見されるようになり、確実に梵字に対する意識は高くなってきている。

2. 研究の目的

韓国の梵字については、平成 21 年より 3 箇年、科学研究費補助金を得ることができ、その研究成果により、韓国の梵字文化のアウトラインを明らかにすることができた。銅鐘の研究が中心であったが、どのような文物に梵字が施されているのか、時代ごとに梵字がどのように変遷していくのか、使われる真言・種子はどのようなものがあるのか、などが明らかになってきた。

その成果をもとに、本研究では、考古学・美術史・建築学の分野における様々な物質資料を対象をひろげ、記された韓国梵字について、集成をおこない、各時代の様相を把握し、それらがもつ編年的位置、梵字が遺物に記された意味を考察し、韓国梵字文化の全体像を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 東アジア梵字文化研究会では研究会を月 1 回、韓国における現地調査を年 1 回というペースで実施してきた。そのため、本件は個人申請にはなっているが、実際には研究会の諸氏とおこなう共同研究の形をとる。

また、韓国においても、檀国大の嚴基杓氏をはじめとして梵字の調査を共同でおこない、恒常的に意見交換をおこなうメンバーがあり、日韓の共同研究の形態をとる。

(2) 韓国の梵字が施された各種資料の集成と検討をおこなう。これまで韓国において梵字が施された文物は高麗時代から朝鮮時代にかけてのものである。

梵字が施されたものとして、金属製品（銅鐘・香炉・銅鏡・金鼓・風鐸・陀羅尼を入れる携帯用の箱・金銅盤・舍利容器など）②瓦埴、③仏像納入品（喉鈴筒・服飾・陀羅尼など）、石造物・石製品（石塔・浮屠・墓誌・石仏・石幢・石碑・石棺・墓の基壇石など）、仏画、木造建築・木製品（木造

建築の丹青・疏台・竹籠・板木、木棺など）、陶磁器、紙類（経典・陀羅尼・呪符など）が対象となる。

博物館・美術館から刊行されている図録、遺跡の発掘報告書、建築の実測調査報告書などを精査し、集成をおこなう。

梵字の内容は後述するように真言や陀羅尼と呼ばれるものが多い。図録などに掲載された写真だけでは内容が一部しかわからない。重要なものについては踏査、実見を通して内容の把握に努める。

(3) 朝鮮時代の梵字は独自の字体が形成される。これは中国から朝鮮半島へと各種の仏教の伝播のなかで、形成されたもので、韓国の梵字を考える上で中国との比較検討は欠くことはできない。中国梵字文化については個別的な詳細な研究はほとんど見られない状況であるが、元代居庸関・遼代多宝石塔（九州国立博物館）といったこれまで研究の蓄積のある資料を基礎資料としながら検討をおこなう。

中国の銅鏡類は、図録に掲載されているものも多く、高麗・朝鮮時代の銅鏡と直接的な比較研究が可能なることから、銅鏡を中心に集成することによって、韓中梵字の比較、検討をおこなう材料とする。

(4) 韓国の梵字は異体字が多く、読解できないものもまだ多い。いっぽう、梵鐘には、六字大明王真言、破地獄真言、浄法界真言などの陀羅尼が記されており、順序通りであれば、異体字の把握が難しくない。これらを集成し、年代順に配列することによって、梵字の変遷を理解しながら、フィールドワークで使える利便性のある資料を作成する。

4. 研究成果

(1) 日本の梵字は基本的に平安時代以来の悉曇の伝統を継続する。それに対して、中国の梵字は悉曇からナーガリーへ、ナーガリーから現在チベット仏教で使用されているランチャへと変遷すると語られるのが一般的である。ところが、元代居庸関の梵字をナーガリーと見る見解が存在することに現れているように（田久保周譽『梵字悉曇』）、ナーガリーの位置付けは曖昧である。朝鮮梵字研究の立場から、居庸関のものをランチャとし、ナーガリーとは、印度から影響を受けながら悉曇からランチャへ移行する過度期的な梵字とみると理解しやすい。

いっぽう、韓国の梵字は、悉曇の知識で読めるものは悉曇の範疇でとらえ、居庸関に代表される梵字に近いものはランチャ体とみてよい。そして、ランチャ体の影響を受けて朝鮮時代に独自の字体に変遷していくことになる。

具体的には高麗大蔵経（「瑜伽金剛頂経积字母品」）、居庸関、真言集冒頭の字体、同下 44 丁所載の字体の 4 種を韓国の梵字

を検討する際の基本字体として活用することができると明らかになった。

(2)ランチャはネパールの梵字と称され、中国でも宋代から使用が認められ(宋代本「孔雀経」)、宋・遼代では両者の併用が見られる。元代以降は梵字がほぼランチャに転換するようである。元・金代には銅鏡に梵字が記される事例がしばしば見られ、明・清代には青華白磁に梵字を確認することができる。また、現在開城にある演福寺鐘・永樂大鐘をはじめとして、元以降の銅鐘にも梵字が見られる。

中国の元・金代のものと考えられる銅鏡には准胝(堤)観音真言を表したものが代表的な鏡式で、ここには浄法界・六字大明王・護身といった真言をとまなう。准胝観音真言は韓国で多用される真言であるが、真言後半の om ca le cu le cun dhi sva ha (bhrum)だけを用いる。また銅鏡ではなく銅鐘に多く用いられる点がことなる。さらに、浄法界と六字大明王真言もよく現れる真言であり、こちらは銅鐘とともに銅鏡でもよく使用されている。

いっぽう韓国では短い柄をもつ小型鏡がしばしば墓から出土する。これは中心に卍、まわりに六字真言を表すものが多いが、卍を仏に見立てれば、中国の准胝鏡を簡素化したものと見なすことも無理ではない。詳細な年代の分かるものがほとんどなく、時間的な関係が不明であるが、引き続き検討を要する課題である。

(3)梵字の内容と梵字の字体から文物の時期を類推できるのではないかとすることが継続的な課題であった。異体字の整理もおこなう目的の第一義もこの点にあった。また、銅鐘の場合、共通する梵字、真言の使用は無銘鐘の工人系譜を考える上で大きな糸口になる。

韓国で梵字を伴う銅鐘は140例を数えるが、その大部分が朝鮮後期鐘(1601~1900年)である。これらに施された梵字は om だけを繰り返すものももっとも多く、真言は六字大明王真言が多く、破地獄真言、浄法界真言、准胝真言も少なくない。このほかに宝楼閣隨身真言、四方真言、三密真言、法身真言、報身真言、応身真言などがある。

このうち六字大明真言(om ma ni pa dme hum)について記すと、もっとも古い事例は、1469年製作の水鐘寺銘鐘で、ここ用いられる梵字はすでに『真言集』の字体に近い。つぎは1641年の河東双碓寺鐘と時代は飛ぶことになるが、朝鮮時代後期になると、しばしば、pa が pha と表現されることが多くなる。また ma と dme の区別がしばしば曖昧になるが、これは発音上 d 音が脱落するためと考えられる。梵字は工人グループごとに同種のものを使用する傾向にある。

梵字の類似によって工人系譜を考えることのできる1例として、無銘鐘である修徳寺

大雄殿鐘を挙げておく。この鐘の梵字は上段に六字大明王真言、下段に破地獄真言をあらわし、玉泉寺鐘樓鐘(1776年)と法住寺円通宝殿鐘(1785年)と字体が同板の使用かと思われるほど一致する。また、鐘の法量を含めて意匠は後者と共通しており、1785年を前後する時期のものとして考えることができるだろう。

(4)瓦埵も年紀のあるものが少なくなく、また製作技法の検討から年代をある程度絞り込むことが可能である。梵字のある梵鐘が少ない高麗時代や朝鮮時代前期の梵字を補完するとともに、銅鐘の梵字と比較する上でも重要な資料である。

このうち、梵字の字体がもっとも悉曇に近く韓国の梵字資料の中でももっとも古い1群に位置付けられるものは、慶州徳洞埵で埵塔を構成する埵材と考えられる。スタンプによる刻字で、宝楼閣真言に近い真言と、三尊をあらわす種子の可能性をもつ2種に大きく大別できる。時期は統一新羅時代とみる考えもあるが、類例がなく時期の設定は難しい。ただ、これと字体が類似する瓦は高麗時代にもあり、無理に統一新羅まで遡る必要はないだろう。

瓦当の高麗時代か朝鮮時代かの判断は、第一に瓦当裏面の布目の有無、すなわち布目があれば朝鮮時代の可能性が高い。第2に丸瓦や平瓦との接合角度で、高麗時代のものは100度以下の場合が多い。このような製作技法に字体を検討しながら、時期を総合的に判断することになる。

高麗王宮跡や恭愍王陵から出土する瓦当の中に、明らかにランチャが使われているものがあり、14世紀後半に高麗でもランチャが入って来たことが確認できる。15世紀代、朝鮮時代になってもランチャは檜巖寺をはじめ一定数は存在するが、16世紀にはほとんどなくなるとみてよく、瓦においても朝鮮的な梵字が盛行する。

梵字は、軒丸瓦は高麗時代を中心に六字大明王真言のような陀羅尼がみられるものの、圧倒的に om の1字が記されることが主流である。また装飾的な宝珠形唵字図像もあわせて使用される。これに対して軒平瓦は、1字以上の梵字を記すことが一般的である。初期には六字大明王真言や3字の梵字が多いが、16世紀以降は梵字を左右に1字ずつおくことが多くなる。

(5)梵字の集成作業を通して、梵字は寺院からだけでなく墳墓遺跡からも散見することが分かってきた。まず13世紀の墓誌の裏に陀羅尼が記された事例があり(梁氏門中墓誌)、朝鮮時代には墳墓に紙製の陀羅尼(青陽安心里)を納めたり、陀羅尼を印判でおした服飾(坡州慶州鄭氏温墓)をもつものが、水漬けにより有機質が良好に残った墓から確認されている。また、現時点では極めて稀な事例であるが、墳墓護石(晋州平居洞5号

墓) 木棺(淳昌雲林里農所墳墓) 石棺(草溪卞氏始祖卞庭実墓)に直接梵字を施した事例も存在し、葬送の中の梵字のあり方について注目すべきであろう。石棺に梵字があるのは中国でも遼晩期とされる朝陽西上台遼墓にあり、今後、韓中の比較検討が必要となるう。

(6)近年韓国では仏像の胎内に納められた腹蔵品の調査が活発になっている。今次、月精寺聖宝博物館所蔵の上院寺文殊童子座像(1466年)の腹蔵品をはじめ、七件の腹蔵品の調査をおこなった(『歴史考古学』第69号)。朝鮮時代の『造像経』に記された腹蔵品作成と納入についての儀礼の体系を理解することができるのと同時に、紙や布に記された良好な陀羅尼資料を得ることができた。

(7)年度ごとに梵字を対象とした現地踏査をおこなってきた。資料を実見できた寺院や博物館・美術館は以下の通りである。

平成24年度：江原道・ソウル地域。寿陀寺、清平寺、霊穴寺、明珠寺、月精寺、新興寺、洛山寺、乾鳳寺、安養寺、仏教中央博物館、国立中央博物館、国立春川博物館、関東大学校博物館、韓国美術博物館。

平成25年度：京畿道・全南地域。金山寺、禅雲寺、双溪寺、大興寺、宝林寺、松広寺、仙巖寺、月南寺跡、嘉会民画博物館、安養歴史館、松巖美術館、仁川広域市立博物館、全北大学校博物館、国立羅州文化財研究所、韓国民族遺産研究院、木浦大学校博物館。

平成26年度：慶尚南道、全羅南道、済州道。通度寺、仏国寺、大非寺、観龍寺、香林寺、花芳寺、法興寺、龍門寺、玉泉寺、安静寺、水精寺跡、法華寺、国立慶州文化財研究所、東国大学校慶州キャンパス博物館、順天大学校博物館、国立済州博物館、済州大学校博物館。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

高正龍「檀国大学校石宙善紀念博物館所蔵の梵字資料」『歴史考古学』第71号、査読なし、2014、76-81

高正龍・小林義孝・松永修輔・松波宏隆・三木治子・横田明・金大煥・嚴基杓「韓国梵字資料調査(2011・2012年調査)」『歴史考古学』第69号、査読なし、2014、1-71

嚴基杓・高正龍「襄陽道寂寺址 史蹟 青石塔」『博物館誌』第20号、査読なし、2014、19-30

高正龍「故小川敬吉蒐集資料の梵字瓦」『東アジア瓦研究』第3号、査読なし、2013、101-115

高正龍「檀国大学校石宙善紀念博物館所蔵高麗梵字瓦」『文化史学』第38号、査読なし、2012、53-80

高正龍「韓国江華島禅源寺跡の梵字瓦」

『東アジア瓦研究』第2号、査読なし、2012、66-82

高正龍・小林義孝・松永修輔・松波宏隆・三木治子・山川公美子・横田明「韓国梵字資料調査(2009・2010年調査)」『歴史考古学』第65・66合併号、査読なし、2012、1-114

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高正龍(KO JUNGYONG)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40330005

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号